
あのとき油断をしなけば...

ポトフ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あのとぎ油断をしなれば…

【Nコード】

N8123C

【作者名】

ポトフ

【あらすじ】

暗い帰り道、一人走る少年の心を書く。怖いようで実は怖くない田舎者の執筆するノンフィクションな話。

(前書き)

この話はノンフィクションです。

作者が実際に体験したお話です。

あ那时的気持ちは今でも覚えています…

俺は今、学校の帰り道を自転車に乗って走っている

時間は6時半、季節が秋なだけにやけに暗い

こんな時間に帰る事は滅多にない

…いつもと違う帰り道はそれだけで恐怖を感じる

こんな田舎道を通る車もまったくいってない

真っ暗な夜道にオレンジの街灯が灯って恐怖をさらに煽る

そのときであった、遠くの方の道に黒く小さい山が見える

このあたりにはよく狸や猫の死体がある

いきなり飛び出して車に轢かれてしまったためだ

幽霊だとは思わないがこの暗い道で死体を見るのは嫌だ

少しドキドキしながら近づいていく

……枯れ葉の山だった

このあたりの住人が掃いてそのまま置いておいたのであろう

少しホツとした

だがこの暗い空間の中では些細な物でも大きな恐怖を感じてしまう

古びたカーブミラーが見える

俺はこのカーブミラーを見た瞬間、写るはずのない物が写っていた

らどうしようと思った

まあそんなものは杞憂に終わるのだが

そこからただの看板の影に怯えたりいきなり飛び出してきた猫にび

びったりしながら帰り道の半分ほど走った

今度は街灯の明かりもなくなり自転車のライトのみを頼って走る

事になるとまた恐怖が押し寄せてきた

そこで俺は鼻歌を歌いながら帰る事にした

今流行の歌を歌いながら走ると少し、恐怖感が薄れる

いかにも何かでそんな橋を渡るともうすぐ国道に出るといつとこまで来た

国道に出れば街灯が多くなり、車の通行量もかなりあるので恐怖を感じる事はまったく無くなる

……今考えると国道に近づいた事により俺は油断をしてしまったのかもしれない

気づいていなかったのだ、気配を

ガサツという音が聞こえる

俺は無くしていた恐怖が蘇ってくるのを感じた

そして恐る恐る音のした方向を向くと……

田んぼ、そしてそこから帰ろうとしている農家のおばあちゃんがいた

これは悪夢か、否、現実だった

俺は蘇ってきた恐怖の変わりにとても恥ずかしくなってしまった

なにせ調子に乗って少し音量を上げた鼻歌を聞かれてしまったのだ

速度を上げてすぐさまその場を離れる

おばあちゃんがどんな顔をしていたのかは暗くてわからなかったが

間違いなく鼻歌は聞かれていただろう

恥ずかしくてたまらなかった

そのあとは特に何事も無く国道に出て、家に帰ることが出来たが、

そのときの気持ちは今もはっきりと覚えている。

(後書き)

まず、こんな馬鹿みたいな話を読んでくれてありがとうございます。
どうでしたか？

皆さんにもこういう体験はあったのではありませんか？

そういうときはまさに顔から火が出ますよね。

また投稿することもあるかもしれないのでそのときはよろしく願
いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8123c/>

あのとき油断をしなければ...

2010年10月11日01時41分発行